

## ④ 評価の仕組みづくり

高等学校では、令和4年度新入生より新しい学習指導要領（平成30年改訂）に基づく授業が年次進行で実施されています。この学習指導要領の中で「学習評価」の在り方が改めて規定されたことにより、多くの高等学校が評価の仕組みづくりに力を入れて取り組まれていることと思います。この章では、学習評価の基本的な考え方を確認した上で、評価の仕組みづくりの手順を具体例とともに説明します。

### 1 新学習指導要領における学習評価

「学習評価」に関わる学習指導要領の変更点

英語教育の課題	➡	新学習指導要領での対応
・外国語運用能力の向上	➡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話すこと，書くことによる発信能力の育成強化（「論理・表現Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」の創設）</li> <li>・「話すこと [やり取り]」の領域を設定</li> <li>・「外国語を使って何ができるようになるか」を念頭に置いた「生涯にわたり学習する基盤」の育成</li> <li>・「見方・考え方」を働かせた「生きて働く力」の育成</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校種間の接続の円滑化</li> <li>・学習評価に基づく授業改善</li> <li>・学習評価手法の統一</li> </ul>	➡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育成すべき三つの資質と能力の明確化</li> <li>・学校種間の学びの接続及び統合的な言語活動を一層重視</li> <li>・中学校の学習内容の定着（「英語コミュニケーションⅠ」の創設）</li> <li>・PDCAサイクルを用いた「指導と評価の一体化」</li> <li>・評価観点の明確化と観点別評価の普及</li> <li>・授業改善や組織運営の組織的，計画的な改善（カリキュラム・マネジメント）</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・知識偏重からの脱却</li> <li>・言語活動の充実（特に複数領域を統合した活動及び「即興性」のある活動）</li> </ul>	➡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知識・技能のコミュニケーションでの活用</li> <li>・思考・判断・表現を繰り返すことによる学習の深化</li> <li>・パフォーマンス活動及びパフォーマンス評価の充実</li> <li>・複数の領域を関連付けた統合的な言語活動の実施</li> </ul>

### 2 学習評価の考え方

○適切な目標を設定し，適切な評価規準を作成する（どういった力を育成するのか）

○「生きる力」の育成，具体的には以下の三つの資質，能力を育成する

①「知識及び技能」（「何を理解しているか，何ができるか」）

②「思考力・判断力・表現力等」（「理解していること・できることをどう使うか」）

③「学びに向かう力・人間性等」（「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」）

➡各教科の目標はこの三つの柱に基づいて設定

➡三つの目標を三つの観点で評価する（一体的に育成）

### 3 評価の3観点

外国語科の目標：「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成

「知識・技能」	知識：外国語の音声や語彙，表現，文法，言語の働きなどについて理解を深めている。 技能：外国語の音声や語彙，表現，文法，言語の働きなどの知識を，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて，目的や場面，状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けている。
「思考・判断・表現」	コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，日常的な話題や社会的な話題について，外国語で情報や考えなどの概要や要点，詳細，話し手や書き手の意図などを的確に理解したり，これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりしている。
「主体的に学習に取り組む態度」	外国語の背景にある文化に対する理解を深め，聞き手，読み手，話し手，書き手に配慮しながら，主体的，自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとしている。

### 4 学習評価の仕組みづくり

ここからは，学習評価を実施するに当たり準備することを四つのステップで説明していきます。これらの仕組みづくりは年度開始前に行っておくことが理想的です。しかし，実際には日々の学習指導を進める中で評価項目を新たに設定したり，見直したりすることも十分あり得ます。大切なことは，評価項目の設定においても，それを見直す場合においても，教師間で情報を共有し，指導と評価の目線合わせをすることです。

〈学習評価の仕組みづくり〉

- Step 1** 学年ごとの目標の設定（CAN-DOリストの作成）
- Step 2** 各単元の観点別評価規準の設定（学習指導マネジメントシートの作成）
- Step 3** 詳細な評価計画の作成
- Step 4** 各活動の評価基準表（ルーブリック）の作成

#### Step 1 学年ごとの目標の設定（CAN-DOリストの作成）

学習評価を実施する前提として，高校3年間で外国語（英語）の学習指導を通じてどんな力を身に付けさせたいか，その目標を決めておく必要があります。学習指導要領に示す目標や内容に照らし合わせて学習状況を評価することを「目標準拠評価」と言います。外国語科においては，CAN-DOリストを用いて，各学年について目標設定を行ってきました。これは，「外国語を使って何ができるか」という観点から「～できる」という能力記述文で表記された「学習到達度目標」です。『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』（文部科学省 2013年）にはCAN-DOリストを作成する目的として以下の3点を示しています。

- 外国語能力向上のために，生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し，教員が生徒の指導と評価の改善に活用する。
- 学習到達目標を，言語を用いて「～することができる」という能力記述文の形で設定することにより，学習指導要領を踏まえた，4技能を有機的に結び付け，総合的に育成する指導につなげる。
- 教員と生徒が外国語学習の目標を共有する。

CAN-DOリストは各校で設定することになっています。そのため，その記述が各校の実態に合っていることはもちろん，上記の目的に適うように適切に運用されていることも大切です。

◆CAN-DOリストの例（1年生）

聞くこと	読むこと	話すこと [やり取り]	話すこと [発表]	書くこと
①授業担当者やALTのオーラルイントロダクションや、指示をおおむね理解することができる。 ②日常的な話題や社会的な話題について概要を把握したり、必要な情報を聞き取ったりすることができる。	①各文の意味のまとめりや文同士の論理関係を理解することができる。 ②日常的な話題や社会的な話題について、背景知識を活用して概要を理解することができる。	①相手の好きなことや趣味について、質問したり、質問に答えたりすることができる。 ②過去の出来事や未来の計画について、質問したり、質問に答えたりすることができる。	①日常的な話題について、30秒以上話すことができる。 ②過去の出来事や未来の計画について、順序立てて30秒以上話すことができる。	①主述関係の明確な文を書くことができる。 ②日常的な話題や社会的な話題について、つながりのある2～3文を書くことができる。

**Step 2 各単元の観点別評価規準の設定（学習指導マネジメントシートの作成）**

旧学習指導要領の下では、「年間指導計画」を作成し、見通しをもって学習指導を行っていたと思います。新学習指導要領では、「学習指導マネジメントシート」を作成して、指導計画を立てることになります。マネジメントシートの特長は、「内容のまとめり（五つの領域）」ごとに「観点別評価規準」を記載して指導の計画を立て、指導実施後によかった点と改善すべき点、そして改善方法を記入することです。これらの特長により、今まで以上に年間の指導に見通しをもつことができますし、カリキュラム・マネジメントにおいて重要なPDCAサイクルを回して次年度の指導に生かすことが容易になります。

◆「学習指導マネジメントシート」の書式（抜粋）

単元及び学習内容	計画時に記入する事項(P:計画) ※前年度の申し送り事項を踏まえて					観点別評価規準	評価方法										実施後に記入する事項(D:実行(実施状況)、C:評価(反省)、A:改善点)							
	記述時期	評価の観点	読むこと	書くこと	聞くこと		話すこと	書くこと	聞くこと	話すこと	書くこと	聞くこと	話すこと	書くこと	聞くこと	話すこと	書くこと	聞くこと	話すこと	書くこと	実施後評価	改善方法		
Lesson 1: Friendships in the Digital Age 【単元の目標】 デジタル時代における友達付き合いに関する文章を読み、その概要や要点を把握し、それに関連するテーマについて、自分の考えを簡潔に表現することができる。	6	他	○	○	○	文の要素と基本文型についての理解を深め、ブレンデッドリアリティの時代における友達付き合いについての文章を読み取る技術を身に付けている。 デジタル時代における友達付き合いについて、自分の意見を述べることができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4月下半期	
Lesson 2: Enjoy Past, Present, and Future 【単元の目標】 方陣とその関係に関する文章を読み、その概要や要点を把握し、さらに理解を深め、それに関連するテーマについて自分の意見を表現することができる。	6	他	○	○	○	現在・過去・未来の基本時制及び完了形・完了進行形について理解している。 方陣の関係言葉の変遷について要点をまとめ、英語で表現することができる。 方陣とその関係言葉についてその理由を理解し、平易な表現で書かれている。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5月上旬	

**Step 3 詳細な評価計画の作成**

実際に評価を行うためには、何を評価対象にするのかを計画しておく必要があります。そのために単元構想を作成します。例えば、1学期中に行う三つの単元について、「授業中の活動観察」「ワークシートへの取り組み」「パフォーマンステスト」「ペーパーテスト」を評価の対象とし、それを総合して1学期の観点別評価を行うという計画が考えられます。

◆1学期の詳細な評価規準と評価例

	活動観察			ワークシート		
	単元1 「話すこと [発表]	単元2 「話すこと [やり取り]	単元3 「話すこと [やり取り]	単元1 「書くこと」	単元2 「読むこと」	単元3 「聞くこと」
知識・技能	b	b	b	a	b	a
思考・判断・表現	b	a	b	a	b	b
主体的に学習に取り組む態度	a	b	b	a	a	a

パフォーマンステスト 「話すこと [やりとり]」	ペーパーテスト 「読むこと」	ペーパーテスト 「書くこと」	学期末の 観点別評価	学期末の評定
a	a	a	B	4
b	b	b	B	
a	/	a	A	

※各活動の評価の基準 a…十分満足できる b…おおむね満足できる c…努力を要する

※観点別評価の基準 A…十分満足できる B…おおむね満足できる C…努力を要する

※斜線部分 ( / ) は評価の対象としない項目

理論上は「内容のまとめ (五つの領域)」と「3観点」の組み合わせで、15項目を評価することができますが、各単元で15項目全てを評価するのは現実的ではありません。よって、各授業で「記録に残す評価」を精選し、各単元で評価する項目を調整することで、学期や学年を通して15項目を偏りなく評価することが理想的です。

実際に評価をつける際には、a・b・cの組み合わせにより、観点別評価のA～Cを決定する方法があります。ただ、この方法は評価対象が多い場合は、処理が複雑になりがちです。なので、評価対象についてa=3点、b=2点、c=1点などと定め、その合計点によって観点別評価のA～Cを決定する方法が考えられます。例えば、「知識・技能」について「内容のまとめ (五つの領域)」を合わせて50点の配点をしたとして、40点以上ならA、39点～11点はB、10点以下はCとするというような決め方です。また、評定を決定する際にも、観点別評価のA=3点、B=2点、C=1とし、その合計点により、5段階の評定を決定することができます。

#### Step 4 各活動の評価基準表 (ルーブリック) の作成

授業中に行う言語活動やパフォーマンステストを評価する場合は、その評価基準表としてルーブリックを作成することが効果的です。ルーブリックを作成することで、教師間で統一された基準で評価することができます。また、事前に生徒とルーブリックの内容を共有することにより、どのような点に留意して活動に取り組めばよいかを伝えることができます。

##### ◆パフォーマンステストのルーブリック例

○領域 「話すこと [発表]」

○内容 「おすすめの観光地」についてのプレゼンテーション

○「思考・判断・表現」の条件

条件1 おすすめの観光地を提示している。

条件2 その観光地について場所などの基本的情報を述べている。

条件3 その観光地について魅力を二つ以上述べている。

○採点の基準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的学習に取り組む態度
a	・適切に語彙や表現が使用されている。 ・聞き取りやすい声量及び流暢さで話している。	・三つの条件を満たした上で、自分の体験や感情などを含めて詳しく話している。	・三つの条件を満たした上で、自分の体験や感情などを含めて詳しく話そうとしている。
b	・おおむね理解できる語彙や表現が使用されている。 ・おおむね聞き取りやすい声量及び流暢さで話している。	・三つの条件を満たして話している。	・三つの条件を満たして話そうとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

## 5 おわりに

これまで見たように、学習評価は学習指導において大変重要な役割を担っています。しかし、いま一度確認しておきたいのは、評価は手段であって目的ではないということです。評価が生徒の学びを促進するためにあるという点を肝に銘じておきましょう。

最後に、ここまであまり触れることができなかつた重要な点を3点指摘しておきたいと思います。

1点目は、ICT機器の使用についてです。学習評価に関しては「教師が評価のための「記録」に労力を割かれて、指導に注力できていない」という課題も指摘されています。令和元年度に「GIGAスクール構想」が打ち出され、「高速大容量の通信ネットワーク」を使用した「1人1台端末」を利用して「個別最適化された創造性を育む教育の実現」に向けてICT機器の教育現場での活用が進められています。「ICT機器を基盤とした先端技術の活用」を通じた生徒の学習改善が主たる目的になっていますが、一方で、教師にとっても「統合型校務支援システムをはじめとしたICTの導入・運用を加速していくことで、授業準備や成績処理等の負担軽減にも資するもの」とであると指摘されています。「ロイロノート・スクール」や「Microsoft Teams」などのアプリケーションを学習評価で活用している学校も増えています。生徒の作品提出、評価、クラス全体での共有などが容易になり、教師による評価だけでなく生徒による自己評価、相互評価など多様な活用も考えられます。学校の状況に合わせて積極的に活用してみましょう。

2点目は、生徒の自己評価が重要であるという点です。学習指導要領では、教師中心ではなく生徒中心の学習活動が強調されています。評価についても同じことが言えます。生徒自身の評価、生徒同士の評価を積極的に取り入れ、活動の振り返りを充実させましょう。その際、念頭に置いておかなければならないのは、その活動が生徒の主体的、自律的な学びにつながっているかどうか、という点です。次の学びに活かされるような評価を意識しましょう。

3点目は、CAN-DOリストや評価規準を作成する際に大変参考になるCEFR（欧州言語共通参照枠）についてです。学習指導要領でも触れられているとおり、CAN-DOリストやルーブリックなど評価規準の作成については、ヨーロッパの複言語主義を目指した取り組みの成果であるCEFRから強い影響を受けています。日本人学習者のために再構成されたCEFR-Jもあります。パフォーマンステストの採点の基準の作成などにも活用してみましょう。

### ❖手引を作成するに当たり参照した資料・書籍❖

- ・『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』 文部科学省 2013
- ・「カリキュラム・マネジメントについて」 文部科学省 2017  
([https://www.mext.go.jp/content/1421692\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1421692_5.pdf))
- ・『【高等学校 外国語編】学習指導要領（平成30年告示）解説』 文部科学省 2018
- ・『「指導と評価の一体化」のための 学習評価に関する参考資料 高等学校 外国語』 国立教育政策研究所 2021
- ・『小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）』 文部科学省 2019
- ・『ペーパーテスト&パフォーマンステスト例が満載！高等学校外国語新3観点の学習評価完全ガイドブック』 菅正隆、松下信之著 明治図書 2022